関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当：「Doch　とは何ぞや？」の構造主義的解釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 東洋出版 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 清昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/837

関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当

——「Doch とは何ぞや？」の構造主義的解釈——

佐　藤　清　昭

探究 ドイツの文学と言語
立川洋三先生定年退職記念論文集（1995 年 3 月）抜刷

関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当*

——「Doch とは何ぞや？」の構造主義的解釈——

佐　藤　清　昭

0.　はじめに

関口存男 (1894～1958) の著作の中に「Doch とは何ぞや？」という短い論文がある。ドイツ語にも翻訳され，注目を集めた[1]ものである。

その「Doch とは何ぞや？」という「正面切った」題名からは，そこでの主張が doch の「用法」のすべてに該当するであろうと想像されるが，研究者たちの解釈は必ずしも一致していない。関口がそこで行っている分析が，「文中でアクセントを持った doch」にだけ当てはまり，アクセントを持たない doch，いわゆる「心態詞」(Abtönungspartikel, Modalpartikel) の doch には該当しないという解釈が大勢をしめているのである。[2]

本稿では，関口の求めた doch の「本質」が（構造主義の研究対象である）「言語体系」(Sprachsystem) 上の要素として位置づけられること，したがってこれは「心態詞」としての doch の「本質」でもあることを，理論と実証の面から客観的に示してみたい。

以下，まず関口の理解する「本質」の正体を言語理論的に求め（「理論的検討」），次に doch の「本質」と説明される「三つの段階を駅とする二つの運動」が，doch の実際の用法に当てはまるかを確認する（「実証的検討」）。続いてその２つの検討から得られた結論を考察して，最後に関口の行う「本質」と「用法」という区別の意義，そしてこの論文が「意味形態文法」の中で占める特異な位置にふれて，論を終わる。

1. 理論的検討

1.1. doch の「本質」

関口はこの書の冒頭で，doch の「本質」をその「用法」から区別する：

> 「**小先生**　先生，今日は一つ doch に關する御高説を伺ひたいものですな。こいつはよく學生に問はれて閉口するのです。『doch の用法には幾通りもあって，一寸さう簡單に述べるわけには行かないね』とか何とか云つてお茶を濁しては居ますが，實のところ私にもよくは解らないのです。
>
> **大先生**　用法は勿論幾通りもあるけれども，それらの幾通りもの用法の間に何の共通點も無いかの様に思はせては，學生が困るでせうな。
>
> **小先生**　學生ばかりぢゃない，私が第一非常に困るのです。辭書でも研究したら少しは本質らしいものが摑めるかと思つて，ありとあらゆる辭書を片つ端から調べて見ましたが，doch の用法の分類こそしてあれ，全體を一貫する主義乃至本質と云つたやうなものにはちつとも觸れてゐない。結局どの點が重要でどの點が附帶的なのか，どの意味が根本的でどの意味が派生的なのか，遂に要領を得ませんでした。」(202 頁 1～11 行目，下線佐藤)

この言葉から関口が「本質」と「用法」をそれぞれ次のように理解していることが分かる：

「本質」：用法の間の共通点	「用法」：幾通りもある
用法の全体を一貫	分類が可能
重要で，根本的	付帶的で，派生的

続いてこの「本質」は日本語の「やっぱり」と結びつけられる:

> (小先生の，「全體を一貫する主義乃至本質」の「簡單な便利な教へ方を定めて置きたい」という言葉に続いて)
>
> 「**大先生**　それは，『譯語』で教へて行くのが一番手つ取り速くは

ないでせうか。

小先生　ところが，どの辭書を見ても碌な譯語が一つもありません。……かうした ja と同じ意味の doch が『しかし』『それにも拘らず』とどう云う關係に立つてゐるのだか，要するに一向わかりません。辭書こそは譯語に全重心を置いて本質を明らかにすべきものでせうにね。

大先生　『しかし』や『それにも拘らず』では doch の本質は解りさうにもない。それらは寧ろ一つの特殊な用法の場合であつて，私は『やつぱり』『やはり』といふ譯語から出立しないといけないと思ひますね。」(202 頁 14～28 行目，下線佐藤)

「勿論 doch には色々な場合があつて，それを完全に羅列するとすれば，とても時間がかゝるでせう。けれども，本質を主として問題にすると，まづ「やつぱり」を中心にして考へ，それから出發して……。」(204 頁下より 3～1 行目，下線佐藤)

関口はつまり，日本語の「やっぱり」が doch の用法の全体を一貫する「本質」であるとする。しかし解釈が分かれるのは，「『やつぱり』『やはり』という譯語から出立」というように，「やっぱり」が「譯語」と規定されている点であると思う。別の箇所でも次のように説明されている：

「要するに，ドイツ語をやる人が苦勞をする場合の過半部を一舉に解決する絶好の譯語としては，わたしはやつぱり『やつぱり』を推舉したいと思ふ。」(203 頁 2～3 行目，下線佐藤)

この「譯語」という言葉から，関口が「doch をいつも『やっぱり』と訳しなさい」と主張しているように解釈される可能性があるが，それは正しくないと私は思う。その根拠は，この言葉に続いて「やっぱり」という日本語を使う話者の「思考の過程」が，「論理的に分解」[3] され，また「極く細かく論理的に考へ」[4] られているからである：

「doch（やつぱり，さすがに）は，必ず『さうでないかと思つたら』『さうでないと貴方は仰言るが』……と云つたやうな無言の否定的基礎が必ずその一歩手前に潜伏してゐるのです。」(203 頁下より 9～7 行目，下線佐藤)

「同じ事實に關する否定的宣言を暗黙裡に認められたものと考へて，それを打ち消しつつ『元の肯定に歸る』のが doch です。歸るといふ以上は，本來は肯定であつたにちがひない。故に，極く細かく論理的に考へると，肯定から否定になりかけて，こんどまた改めて肯定に歸る時に『やつぱり』と云ふわけです。つまり三つの段階を驛とする二つの運動です。」(203 頁下より 2 行目～204 頁 3 行目，下線佐藤)

「此の三つの Momente（考因，因子，要件）は，どれが一つ缺けてもいけないので，その各々が，時には或一種の型に限定されたり，或ひは前景に乗り出したり背景に引つ込んだりするに從つて doch の諸種の用法が生れて來ます。」(204 頁 10～12 行目)

「かうした關係（といふよりはむし（ママ）運動・發展）を稱して哲學者は辯證論的運動 (dialektische Bewegung) と呼んでゐますが，さうした筋路を只の一語で云ひ表はす doch とか，『やはり』とかいふ簡單な言葉があるといふのは實に面白い事ではありますまいか？」(205 頁 17～19 行目，下線佐藤)

これらの言葉から，「やっぱり」という日本語が doch の「本質」，つまり doch を使う際の話者の「抽象的」な思考過程を端的に 1 語で表現したものであること，そして「やっぱり」が用法の間の共通点という抽象的な存在であり，具体的な「訳語」ではないことが分かる。

doch の「本質」はさらに，他との比較，「違い」という形で説明される:

「**大先生**　……doch（やつぱり，さすがに）は，……無言の否定的基礎が必ずその一歩手前に潜伏してゐるのです。

小先生　一歩手前に否定があると云ふと，例の nicht ……sondern…… といふ形式をすぐ考へますが，では sondern とどう違ひますか？

大先生　定義をもつと嚴密に考へて下さい。否定から肯定に『移る』のではありませんよ。否定から肯定に『歸る』のです。もつと嚴密に云ふと，同じ事實に關する甲の規定を捨てて乙の規定を取る時は sondern です。同じ事實に關する否定的宣言を暗黙裡に認められたものと考へて，それを打ち消しつつ『元の肯定に歸る』のが doch です。」(203 頁下から 9～1 行目)

「**小先生**　……これがもし『偉くないと思つたら，さうではなくて案外偉かつた』（第一が缺ける）といふだけの要因から成つてゐるとしたら，『さすがに』偉いと云はれるのはむしろ其の當人にとつて非常な侮辱でせう。『偉くない』ことが出立點だとしたらですね。

大先生　御説の通りです。aber（然し）や trotzdem（それにも拘らず）と異るのも亦その點にあります。」(206 頁 8～13 行目)

1.2.「本質」は System-Bedeutung

前節において示されたように，関口の言う「本質」とは，「用法の全体を一貫」し，「用法の間の共通点」であり，「用法のように分解できず」，「根本的」な性格である。また「三つの段階を駅とする二つの運動」というように抽象的に，しかも sondern, aber, trotzdem などとの対比において説明される。このような「本質」とは，言語理論的にどこに位置づけられるのだろうか？

すぐに思いつくのは，ソシュール (Ferdinand de Saussure) 研究で言う「体系」(System)，あるいは「純粋な価値の体系」(ein System von bloßen Werten)[5] である。つまり，「自然的，絶対的特性によって定義

される個々の要素が寄り集まって全体を作るのではなく，全体との関連と，他の要素との相互関係の中ではじめて個の価値が生」[6] じるような「体系」である。そこでは，当該の要素の有無がその体系を構成する諸要素の全体像に影響を及ぼすような関係にある。当該の要素そのものではなく，「他の要素との違い，区別」が問われるのであるから，この「体系」は「区別の体系」と呼ぶこともできる。

これは構造主義の研究対象であり，意味論における「体系」レベル上の要素は System-Bedeutung と名づけうる。心態詞研究で übergreifende Bedeutung と呼ばれているものである。[7]

意味論における System-Bedeutung は，音韻論における音素に相当する。[8] 個々の音素がそれ自体として存在するのではなく，他の音素との関係，他の音素との「差」という形で存在するのと同様の関係にあるのだから（ソシュール：「言語は形式であり，実体ではない」[9]），System-Bedeutung の記述も，その「実質」を求めることによってではなく，他との「関係」を確定することによって行われる。

このような System-Bedeutung は，その形態に純粋に言語的に，一義的 (primär) に対応する意味内容であり，必然的に単一的な性格のものである。つまりある形態とそれに対応する System-Bedeutung は 1 対 1 の関係にある。[10] それは当該の形態の変異体 (Varianten) に共通でそれを統括するものであり，すべての変異体に適用することのできる「言い替え」(Paraphrase) である。[11] したがって System-Bedeutung は，本質的に抽象的な存在ということになる。[12]

前節に引用した関口の言葉にしたがえば，doch の「本質」はここに述べた意味での System-Bedeutung であると結論できると思う。つまりこの「本質」は，doch という形態に「体系」上で対応する唯一の意味内容であり，「心態詞」はもちろん，doch のすべての用法の「本質」ということになる。

以上は，関口が「本質」を「用法」と対比させ，それをどのように理解しているかということに基づいた結論，いわば「理論」上の結論である。次章においては，関口が doch の「本質」を「三つの段階を駅とす

る二つの運動」という言い替え (Paraphrase) を用いて説明していることに注目して，この「三つの段階を駅とする二つの運動」が doch のどの用法に当てはまるのか，確認をする。

2. 実証的検討

以下，doch の用法 (Varianten) を「文相当詞 (Satzäquivalent=否定疑問などに対する返答)」,「接続詞」,「副詞」,「心態詞」に分類して,[13] 検討していく。その手順は次の通りである：

— 「Dochとは何ぞや？」の中の関口自身の分析について
— そこに必ずしも明確には含まれていない心態詞の「用法」について
— 関口が考察の対象としなかった接続詞の「用法」について

2.1. 関口の分析

関口自身は次の「文相当詞」と「副詞」の例をあげ，そこに doch の本質が確認されることを実証している：[14]

Kennst du mich nicht? —— Doch, doch!
Sie bewegt sich doch!
Sie sind doch ein Meister in solchen Dingen!

そこでの説明を，[第一段階 ＝ 肯定]，[第二段階 ＝ 否定の動き]，[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]という形式で書き直してみると，おおよそ次のようになる：[15]

Kennst du mich nicht? —— Doch, doch!

[第一段階 ＝ 肯定]	A は B をよく知っている心算である。
[第二段階 ＝ 否定の動き]	それなのに，B は「お前は俺を知らない」と主張。
[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]	A：いいや，私は貴君をよく知っている。

Sie bewegt sich doch!

[第一段階 ＝ 肯定]	学者の確信：地球は動いている。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　宗教方面の弾圧 → では地球は不動ということに致しておきます。

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　学者の確信：でもやっぱり動いているんだがな。

これより，「文相当詞」と「副詞」には「三つの段階を駅とする二つの運動」（=doch の「本質」）が確認されると結論できる。

2.2. 心態詞

心態詞としての doch の分類の仕方は，発話行為モデル (Sprechhandlungsmuster) に基づくもの，統語論上の機能に基づくもの，またその中の種々の分類と，ほとんど研究者ごとによって異なると言うことができる。以下の検討における $doch_1$ から $doch_7$ までの分類，および例文は Helbig (1988) に従った。(16)

$doch_1$: Wir wollten doch heute abend ins Theater gehen.
今晩，芝居に行くんだったでしょ。

[第一段階 ＝ 肯定]　今晩は芝居に行くつもりであった。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　それなのにあなたは芝居のことを一言も口にしない。そういうつもりではなかった？　約束しなかった？

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　いいえ，やっぱり行くつもりだった。約束した。

結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_2$: Gib mir mein Buch zurück! —— Ich habe es dir doch gestern schon zurückgegeben.
きのう，もう返したじゃないか。

[第一段階 ＝ 肯定]　すでに返してある。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　それを「返してくれ！」なんて，まだ返していない？

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　いいや，やっぱりもう返した。

結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_3$: Komm doch endlich zum Essen!

いい加減でこっちへ来て食べなさい。

[第一段階 ＝ 肯定]　食事ができたら，食卓について食べるもの。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　それなのに，いつまでも何かやっている。来ない？

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　いいや，やっぱり来る。いい加減に来なさい。

結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_4$: Wo waren wir doch stehengeblieben?

どこまでお話ししたんでしたっけ？

[第一段階 ＝ 肯定]　どこまで話したのか知っている。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　失念！知らない？

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　いいや，やっぱり知っているはずだ。ちょっとヒントを言ってくれればすぐに思い出します。

結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_5$: Du hast doch die Wohnung richtig abgeschlossen?

ちゃんとカギを掛けたんだろ？

[第一段階 ＝ 肯定]　ちゃんとカギを掛けた。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　君の不安な顔…カギを掛けないで来た？

[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り]　いいや，君がそんな馬鹿なことをするわけがない。やっぱり掛けて来た。そうだよね？

結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_6$: Das ist doch die Höhe!

こりゃあ，ひどい！

[第一段階 ＝ 肯定]　これはひどい。

[第二段階 ＝ 否定の動き]　普通こんなことはあり得ない。何かの間違い？　そんなにひどくない？
[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り] いいや，やっぱりひどい。
結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

$doch_7$: Hätte er doch den Ratschlag des Arztes befolgt!
先生の言うことを聞いていればねえ！
[第一段階 ＝ 肯定]　先生の言うことを聞かなかった。(現実)
[第二段階 ＝ 否定の動き]　聞いた？生きている？（願望）
[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り] いいや，やっぱり聞かなかった。だから死んじゃった！（現実）
結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる

2.3. 接続詞

関口自身は，「Doch とは何ぞや？」で行っている分析は接続詞としての doch には該当しないとする。(17) しかし確認のために，以下に接続詞の場合を検討する：(18)

Sie hatte die Begegnung bis ins kleinste vorausgeplant, doch es sollte alles ganz anders kommen.
彼女はその出会いを微にいり細にいりあらかじめ計画しておいたのだけれども，すべては思惑からまったく外れた結果となってしまった。
[第一段階 ＝ 肯定]　？計画通りに行かない？
[第二段階 ＝ 否定の動き]　計画通りに行く。
[第三段階 ＝ 肯定への逆戻り] ？いいや，やっぱり計画通りに行かない？
結論：「三つの段階を駅とする二つの運動」を認めることには無理がある

3. 結論とその考察

本稿第１章，および第２章の検討から，次の点が明らかになった：

— 関口による「本質」についての理論的説明によれば，それは doch のすべての「用法」を包括する。
— しかし「三つの段階を駅とする二つの運動」という「言い替え」(Paraphrase) は，「文相当詞」，「副詞」，そして「心態詞」に対応するが，「接続詞」の doch には該当しない。

3.1. doch の「本質」は心態詞にも該当

「Doch とは何ぞや？」の現在までの解釈は，関口の言う「本質」が「文中でのアクセントをもった doch」にだけ該当し，「アクセントをもたない心態詞」には該当しないとしてきたが，第 1 章の理論的検討，および第 2 章の実証的検討は，「心態詞」もそこに含まれることを示している。

この結論はまた，つぎの 2 点からも積極的，および消極的に裏付けられる：

1) 関口が，doch の「用法」として「命令文，嘆願文の doch」，つまり心態詞として分類される doch も含めていること。

> 「勿論 doch には色々な場合があつて，それを完全に羅列するとすれば，とても時間がかゝるでせう。けれども，本質を主として問題にすると，まづ「やつぱり」を中心にして考へ，それから出發して次に命令文，嘆願文の doch，返事としての doch，關係文内の doch と云つたやうに分類して行かなくてはなりません。」(204 頁下より 3 行目～205 頁 1 行目，下線佐藤)

2) 関口が「ここでは接続詞は問題にしない」と明示的に述べているということは，それ以外の用法はすべて「三つの段階を駅とする二つの運動」という「本質」にまとめることが出来ると考えていたと解釈できること。そして関口の著書，および遺稿資料集には心態詞の例文が含まれていること。[19]

関口の言う「本質」を「アクセントをもった doch」にだけ限定するという解釈は，「やっぱり」を「訳語」と理解するか，あるいは「訳語」

としてほど「具体的」ではないにしても，「三つの段階を駅とする二つの運動」という話者の思考過程が（ソシュールの意味での「体系」に属する要素として）非常に「抽象的」な存在であることを十分に考慮しないことによるものと思われる。確かにこの「三つの段階」の相互の関係はさまざまであり，例えば「命令文」の第一と第三段階との関係は，「非現実話法の前提部の独立用法」，あるいは「文相当詞」のそれとは，かなり異なった性質ではあるけれども，「肯定」，「否定」，「肯定」という「三つの段階」が確実に存在し，その間を「行って帰る」という「二つの運動」が確実に行われるという点では，同一のものと言えるのである。(20)

ここで注目に値するのが，「Doch とは何ぞや？」のドイツ語訳を読んだ Harald Weydt と Elke Hentschel である。

Weydt はこのドイツ語訳が掲載された書（„Aspekte der Modalpartikeln“!）の「前書き」で，この論文が「不変化詞を機能的 (funktional) に分析する模範的な一例」であり，「doch の異なった用法を，たった一つの…原理から演繹的に導こうとしている」と述べて，そこに構造主義的な手法が用いられていること，つまり関口の言う「本質」が「体系」上の要素であることを読みとっている。(21)

また Hentschel は，「やっぱり」を使った関口の意図が doch の übergreifende Bedeutung を求めることであったらしい，と指摘する。(22) Hentschel は doch の übergreifende Bedeutung について，単に「対立」(Widerspruch) という観点にしか立っておらず，(23) また関口に言及している箇所でも本来の「三つの段階を駅とする二つの運動」には触れてはいないけれども，「doch（やつぱり，さすがに）は，必ず『さうでないかと思つたら』『さうでないと貴方は仰言るが』……と云つたやうな無言の否定的基礎が必ずその一歩手前に潜伏してゐるのです。」(24) という関口の言を引用して，この記述が自分の行った分析の結果と完全に一致すると述べる。(25)

3.2. 理論的検討と実証的検討の結論における齟齬

「三つの段階を駅とする二つの運動」という「言い替え」が，「否定疑問に対する返答」，「副詞」，「心態詞」には当てはまりながら，「接続詞」としての doch には該当しないという，実証に基づく結論は，本稿第1章の理論的検討の結論（「本質」は doch のすべての「用法」を包括する）と齟齬を来すものである。これはどのように解釈するべきであろうか？

関口は「Doch とは何ぞや？」の最後に次のように述べている：

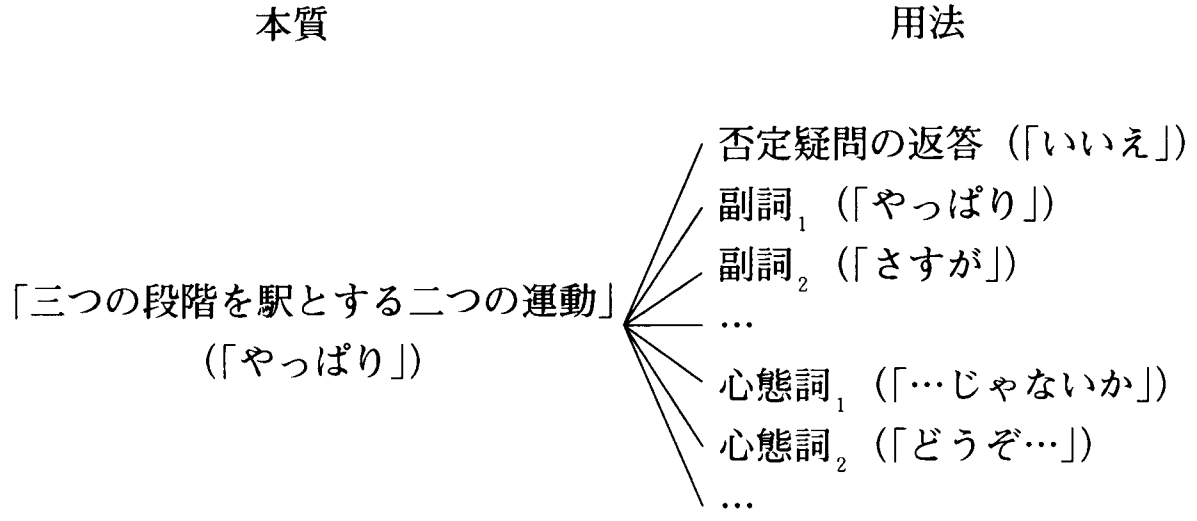
> 「最初にもお断りした通り，今日説明したのは副詞としての doch を主にしたもので，また此の副詞としての doch が他國人には最も困難だから，doch の話をするとすれば，之れが最も自然でせう。たとへ學生にお話しになるにしても，あまり系統的に考へすぎて，云はなくても好い餘計な事まで話の順序として仰有つたりなどするのは不可ませんね。」（206 頁下より 8～4 行目，下線佐藤）

この言葉は，関口が（少なくともこの論文においては）教育者に徹していることを示している。つまり，「三つの段階を駅とする二つの運動」という説明，あるいは「やっぱり」という非常に印象的な日本語を利用した説明は，確かに「系統的」に考え，厳密に観察をすれば，「接続詞」としての用法が含まれないという意味で，「本質」とは呼べないはずであるけれども，大局的な観点をしばしば必要とする「教育」という立場からは容認されうるのであり，また事実，この説明は学習者たちに doch 一般の習得を著しく容易にするのである。言い換えれば，関口の説明する「doch の本質」とは，Weydt と Hentschel の言う Partikel-Paradoxon[26]，すなわち「不変化詞の性格上，その『本質』があまりに一般的，抽象的に過ぎて個々の『用法』(Varianten) の説明へとつながって行かない一方，個々の『用法』の独立した記述はその間に共通項を見出すことを困難にする」というパラドックスを解決する一つの提案なのである。[27]

4. 結びにかえて：「本質」と「用法」の区別

4.1. 教育上の意義

doch に限らず，「本質」と「用法」を区別することの教育上の意義は疑いようがないと思われる。複数の「用法」を単に並列して提示するだけではなく，そこに共通する「本質」を分かりやすい形で示して見せることは，学習者に大きな手助けとなるはずである。[28] いわば次のような図式を学習者に示すことになる。なおここに示される「本質」の「やっぱり」と，「用法」のひとつとしての「やっぱり」は，その「抽象度」において大きな違いがあることに注意されたい。[29]



4.2. 学問上の意義

「本質」を「用法の間の共通点」として理解し，またそれを「用法の全体を一貫」し「分類が不可能」な存在として理解する時，「本質」と「用法」の区別は，言語学にとって一つの重要な意味を持つことになる。この区別は言語理論的には，コセリウ (Eugenio Coseriu) の「体系 (System)」と「通常態 (Norm)」に対応するものであり，[30] 関口の他の書では別の用語を使って区別されている。Weydt ほかの用語も含めて対応表を作ると，次のようになる：

Coseriu	体系のレベル	通常態のレベル	
関　口	本　質	用　法	doch についての区別
	概　念	意味形態	mit についての区別[31]
	機　能	意味形態	接続法についての区別[32]
	意　味	意味形態	冠詞についての区別[33]
Weydt ほか	übergreifende Bedeutung; Invarianten	Varianten	

「本質」は純粋に言語的に与えられているものであり，「他の要素との差」という観点に立った極めて抽象的な存在として，話者に「自由な創造」の可能性を提供する。その一方「用法」は，社会的と伝統的に確定した具体的な「意味の類型」として，その「自由な創造」に対する「規制」として機能する。関口の言語理論の特徴はまさにこのように，話者の言語知識の中に「自由」とそれに基づく「規制」という二つのレベルを明確に区別し，その言語知識を「動的」に把握していたことにある。この点に，「価値の体系」という観点に基づいてのみ話者の言語知識を記述しようとする「構造主義」，あるいは話者の言語知識を社会的・伝統的「規範」の集合と理解する「伝統文法」との違いが存するのであるが，これについては一度詳述したので[34]ここでは繰り返さない。

4.3.「Doch とは何ぞや？」の特異な位置

関口は，このような「動的」な言語観に基づいてドイツ語話者の言語知識を詳細に記述したわけであるが，「Doch とは何ぞや？」は関口の数多い著作の中でひとり特異な位置を占めている。上の対応表から分かるように，関口の求めた「doch の本質」は，「意味形態」（＝「用法」）に対立する存在である。[35]「『意味形態』文法」の創始者であり，ドイツ語文法のほとんどすべての領域で「意味形態」を求め続けた関口が，ここではそれに相対立する「本質」を求めていることは奇異な観を与える。

これは，上に述べた「教育上」の利点を考えてのこととも解釈できるし，また話者の言語知識の中に「本質」と「用法」，「意味」と「意味形態」，「体系」と「通常態」，つまり言語表現における「自由」と「規制」という二つのレベルを区別するならば，当然の事ながら対立概念にも注目せざるを得なかった，と考えられる。

4.4. 関口文法の今日的意義

関口文法の「今日的意義」を疑う声を聞くことがある。しかし，言語の理論的，および実践的研究における「本質」と「用法」（「体系」と「通常態」）という区別の重要性を認識し，しかも純粋に言語的な「体系」上の知識が，実際の発話行為という「談話のレベル」と係わり得るのが，（社会的と伝統的に確立されてある）「具体的な類型」としての「通常態」を通してのみであり，関口の求めた「意味形態」がこの「通常態」上の意味内容であることを考慮するならば，関口文法の今日的意義を疑う声は拠り所のないものと，私は思う。(36)

注

＊ 本稿を執筆するに当たり，関口存男氏が生前収集された「資料集」の doch の項を文献の一つとして利用させていただいた（注 19 参照）。資料の通覧を快諾くださった関口存哉氏，および御家族の方々に感謝の意を表したい。なお，この資料はすべてご遺族の方々の手で整理コピーされており，本稿で使用した「整理番号」はそれに基づいている。

（1） 本稿 3.1. 節参照。

（2） 心態詞研究において，アクセントの有無は必ずしも心態詞を他の品詞から区別する絶対的な条件とはされない（例えば Helbig (1988), S. 36 参照）。doch についても，アクセントを持つ用法を心態詞に含める研究者もいるが，本稿では「心態詞としての doch はアクセントを持たない」と規定して論を進める。この点については注 13 も参照。—— 関口の分析が「心態詞」の doch には該当しないという主張は以下に認められる：岩崎 (1986), S. 36 f.; 三瓶 (1994), S. 16; 宗宮 (1994), S. 171。ただし岩崎氏は，「文中でのアクセントをもたない心

態詞の doch では，本来の意味がさらにいっそう希薄化している」（下線佐藤）と述べて，必ずしも関口の doch の「本質」が「心態詞」に該当しないと明言しているわけではない。また三瓶氏は関口のこの論文には言及していないが，その説明からこれを参照したことは明らかである（同著者の別の論文である Sambe (1986) には，「Doch とは何ぞや？」のドイツ語訳が文献としてあげられ，また本文中に指示もされている：S. 73, 92)。三瓶 (1994) では，アクセントのある doch の説明として関口のそれが応用されているのに対し，心態詞の場合には「構造が違う」とされている。これに対し吉田 (1986) では，心態詞の doch, ja が日本語の「やっぱり」と対照されて論じられている。

（3） 関口 (A; 1975), S. 203, 8 行目。

（4） Ibidem, S. 204, 1 行目。

（5） 参照：Saussure (1916; 1967), S. 95, 132.

（6） 丸山 (1981), S. 93.

（7） übergreifende Bedeutung という用語は心態詞研究において，ある「形態」が示すすべての「変異体 (Varianten)」間に共通な意味内容を指すものとして用いられているが，その「形態」をどこまでとするかは，研究者の間で必ずしも統一的ではない。doch の場合は次の 2 つに分かれる：

A 心態詞としての doch だけを対象とする：Weydt (1969), 35 ff.; Hentschel / Weydt (1990), S. 285.

B 心態詞を含めた doch のすべての用法を対象とする： Weydt / Hentschel (1983), S. 9; Weydt / Harden / Hentschel / Rösler (1983; 1985), S. 159; Hentschel (1986), S. 121 ff.（なお最後の書の別の箇所には，Weydt / Hentschel (1983) で übergreifende Bedeutung という用語を心態詞に限定して用いている，という記述があるが，これは事実に合致しない。参照：S. 145 脚注 25)。

本稿では，後者 B の立場をとり，übergreifende Bedeutung を doch のすべての用法間に共通の意味内容と理解する。—— übergreifende Bedeutung という用語と同じ意味で用いられるものとして Gesamtbedeutung がある。Helbig (1988) はこれを，ある Partikel が異なった文脈と状況の下で得る種々の機能の基礎にある意味内容とする (S. 67 f.)。つまり doch の場合でいえば，Gesamtbedeutung は心態詞 (Abtönungspartikel) と否定疑問に対する回答としての doch (Antwortpartikel) の基礎にある意味内容であり，そこには接続詞と副詞

としての doch は含まれていない (S. 118 f.)。—— 同じく Gesamtbedeutung という用語を用いる Bastert (1985) は，それを心態詞にのみ適用している (S. 44 f., 93)。—— なお Hentschel / Weydt (1990) は，Gesamtbedeutung という用語を（心態詞にだけ適用される）übergreifende Bedeutung から区別して，他の品詞を含めた範囲に広げて用いる (S. 285)。

(8) Weydt (1986) も，übergreifende Bedeutung と funktioneller Phonologe との関係をあげている：S. 30 f.

(9) 参照：Saussure (1916; 1967), S. 134, 146。またこの「形式」と「実体」の関係については丸山 (1981), S. 92 ff., 130 ff. も参照。

(10) この点については以下も参照：Weydt (1986), S. 24.

(11) この点については以下も参照：Ibidem, S. 31.

(12) übergreifende Bedeutung の抽象性については Weydt / Hentschel (1983), S. 3 も参照。—— 意味論における「体系」の記述，つまり System-Bedeutung，あるいは übergreifende Bedeutung を求めることの困難さは，例えば音韻論のそれと比べようがない。しかし求めることが困難であるということは，その存在を否定するものではない。この困難さはつまり「経験的 (empirisch)」な性質のものであり，「理論的 (theoretisch)」なそれではないのである。この点については Weydt (1986), S. 30 も参照。übergreifende Bedeutung を求めることの難しさについては，以下の研究書でも触れられている：Bastert (1985), S. 42, 45; Helbig (1988), S. 70; Hentschel / Weydt (1990), S. 286; Weydt / Harden / Hentschel / Rösler (1983; 1985), S. 159.

(13) ここで用いる doch の「用法」の分類は Hentschel に従った。参照：Hentschel (1986), S. 123 ff. —— なお doch の心態詞としての分類は，研究者の間で二つに分かれている。Weydt / Hentschel (1983) には Und sie bewegt sich dóch. という例文が (S. 9)，また Weydt / Harden / Hentschel / Rösler (1983; 1985) には Und die Erde dreht sich <u>doch</u>. という例文がのっており (S. 162)，ともに「アクセントのある doch」でありながら心態詞に分類されている。その一方 Hentschel (1986) は同じ例文 Und sie bewegt sich dóch. を副詞として，心態詞から区別している (S. 128)。本稿では，この doch は副詞として取り扱い，心態詞には含めない。

(14) 参照：関口 (A; 1975), 204 頁 12〜24 行目；205 頁下より 10 行目〜206 頁 11 行目。

(15) 以下に用いる［第一段階 ＝ 肯定］，［第二段階 ＝ 否定の動き］，［第三

段階 ＝ 肯定への逆戻り］という分類的な説明形式は，関口による。参照：関口 (A; 1975), S. 204, 206。また Sie sind doch ein Meister in solchen Dingen! については関口自身がこの形式を用いて説明しているので，そちらを参照 (Ibidem, S. 206)。

(16) 参照：Helbig (1988), S. 111 ff. また心態詞としての doch の分類の種々なあり方については Hentschel (1986), S. 128 ff. を参照。

(17) 参照：関口 (A; 1975), 204 頁下より 4〜3 行目；206 頁下より 10〜7 行目。

(18) 以下の例文は，Hentschel による。参照：Hentschel (1986), S. 126.

(19) 次の例文を参照：Das versteht sich ja doch ganz von selbst!「それ位のことは勿論わかり切つているではないか」関口 (1935-39; 1971), 第二課「助勢詞の位置」S. 9; Sei doch so gut und halte reinen (sic!) Mund! 関口 (1932; 1969), §260「命令法とその助辞」S. 248; Ich habe doch nur meine Pflicht getan, mein Freund! 関口 (1956; 1977), S. 357, 360 f.,「感情表現詞 ja と doch」という見出しとともに。—— 「遺稿資料集」のファイル「denn, doch, aber, auch, da, das」(整理番号 22) の doch の項には，副詞，接続詞と並んで心態詞の用法として，命令文，間投文中の doch のほかに例えば次のような例文が採用されている：„Woher war er? wie hieß er?“ „Er hieß — hm! wie hieß er doch gleich? Sein Name ist mir wirklich entfallen.“ (Gustav Nieritz: Der Bettelvetter) (整理ページ S–51)； Ottilie wollte an die Ostsee. Otto widersprach. „Wir müssen an unsere vielen Schulden denken!“ „Das können wir doch auch an der Ostsee, Otto?“ (整理ページ S–85)；Aber die Veranlassung! rief Kohlhaas. Sie (pl) werden doch irgend eine Veranlassung gehabt haben! (M. Kohlhaas) (整理ページ S–87)

(20) あるレベルでは明らかに異なる内容を表現すると思われる語を，「体系」上一つの要素にまとめ，その統一的な抽象的意味内容を記述した辞書として注目に値するのが森田 (1977) である。例えば「あらわす」(「現す」,「表す」,「顕す」,「著す」) の「基本となる意味」は，「おもて側に出ていない事物・事態を外に出し，他者が認知できるような状態に変える」というように，(少なくとも)「現す」,「著す」などのレベルに比してはるかに抽象的に説明される (S. 46)。森田氏はその「まえがき」で次のように述べているが，これからその辞書の意図が，「構造主義」の考え方に基づきつつ異形態 (Varianten) の記述を行うことであることが分かる：「語の意味と用法とをじゅうぶん知るため

には，どうしてもその語の基本となる意味から発して，どのように意味が転化していくかを跡づけるとともに，対義関係にある語や類義の語を同時に取り上げて，ことばをセットとして眺めていく辞書が必要である。」(S. 1, 下線佐藤)

(21) 参照：Weydt (1977), S. IX.

(22) 参照：Hentschel (1986), S. 146.

(23) 参照：Ibidem, S. 148 f.

(24) 関口 (A; 1975), 203 頁下より 9〜7 行目。

(25) 参照：Hentschel (1986), S. 146.

(26) 参照：Weydt / Hentschel (1983), S. 3 f.

(27) 構造主義の研究対象である System-Bedeutung を厳密な意味で求めるためには，例えば Doherty (1985)，宗宮 (1994) に見られるような，メタ言語の「形式化」(Formalisierung) は避けられないものと思う。

(28) 同様のことは，Weydt / Harden / Hentschel / Rösler (1983) では，学習者たちが単に Differenzierungen だけではなく，eine festhaltbare Verallgemeinerung を得ることが重要であると述べられ (S. 8)，また Bastert (1985) では，外国語を教授するという点からは，異なった Lexeme を想定するよりもすべての変異体に該当する意味の核 (Bedeutungskern) を抽出する試みの方が意味がある (S. 45) と説明されている。

(29) 以下の図式における「心態詞」の用法を示すものとして，「典型的」な「訳語」を用いる。心態詞の説明に「訳語」を用いることの是非についてはここでは問わない。この問題については岩崎 (1986)を参照。

(30) Weydt と Hentschel も，心態詞の übergreifende Bedeutung と Varianten の区別が，Coseriu の「体系」と「通常態」の区別に対応することを述べている：Weydt / Hentschel (1983), S. 4; Hentschel (1986), S. 149.

(31) 参照：関口 (1933; 1977), S. 15。

(32) 参照：関口 (1938-40; 1973), S. 21。

(33) 参照：関口 (1936; 1975), S. 330。

(34) 参照：佐藤 (1985)。また Coseriu の「体系」と「通常態」の区別，およびその関係諸学問における意義については以下を参照：Coseriu (1952; 1975); 江沢 (1982)。

(35) ここで言う「意味形態」とは，関口が区別したもののうち「第二意味形態」を指す。関口の行う「第一・第二・第三意味形態」の区別については，佐藤 (1985), S. 77 注＊を参照。――「Doch とは何ぞや？」

の中では「意味形態」という用語は一度も使われていない。これに対して，「形態」という語は二度使用されているが，これは前後の関係から「(意味) 形態」と解釈すべきであると思う：「前述の三要因のうちの，どれかに重心が行くことによつて，doch のいろんな形態が生ずるわけで，『さすがに』は其の單なる一例です。強い肯定といふのも亦一つの一例です。その他，doch の此の本質を出立點として，少くとも十個以上の形態が生れます」(206 頁 13～15 行目，下線佐藤)。なお，関口が「形態」という用語を「意味形態」の意味で用いることは稀ではない。例えば関口 (1960; 1976), S. 30, 5 行目を参照。

(36) 関口文法が言語学一般において持つ意義については佐藤 (1987) を参照。

引用文献

Bastert, Ulrike (1985): Modalpartikel und Lexikographie. Eine exemplarische Studie zur Darstellbarkeit von DOCH im einsprachigen Wörterbuch. Tübingen: Max Niemeyer.

Coseriu, Eugenio (1952): System, Norm und Rede. In: E. Coseriu: Sprachtheorie und allgemeine Sprachwissenschaft. 5 Studien, München: Wilhelm Fink 1975, S. 11–101.

Doherty, Monika (1985): Epistemische Bedeutung. Berlin: Akademie-Verlag.

江沢建之助 (1982)：言語通常態論と語学。所収：ドイツ語教育部会会報（日本独文学会ドイツ語教育部会発行）22, S. 37–48。

Helbig, Gerhard (1988): Lexikon deutscher Partikeln. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Hentschel, Elke (1986): Funktion und Geschichte deutscher Partikeln. Ja, doch, halt und eben. Tübingen: Max Niemeyer.

Hentschel, Elke / Weydt, Harald (1990): Handbuch der deutschen Grammatik. Berlin / New York: de Gruyter.

岩崎英二郎 (1986)：独和辞典と心態詞。所収：エネルゲイア（ドイツ文法理論研究会編集）12, S. 34–39。

丸山圭三郎 (1981)：ソシュールの思想。東京：岩波書店。

森田良行 (1977)：基礎日本語。意味と使い方。東京：角川書店。

Sambe Shin'ichi (1986): Zu den Gebrauchsvarianten der Partikel „doch" in mittelhochdeutschen Epen. — unter besonderer Berücksichtigung der Korpora aus dem Epos Hartmanns „Iwein" —. In: エネルゲイア 12, S. 65–93.

三瓶慎一 (1994)：心態詞のはたらき　— 対人コミュニケーションの道具 —。所収：MD 基礎ドイツ語 1994 年 4 月号 (第 12 号), S. 15–17。

佐藤清昭 (1985)：関口存男と意味内容の一元論的区別。所収：アスペクト（立教大学ドイツ文学科論集）19, S. 77–96。

— (1987): 関口文法の今日的意義。所収：ドイツ文学（日本独文学会編）79, S. 176–179。

de Saussure, Ferdinand (1916): Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft. Berlin: Walter de Gruyter 1967.

関口存男 (1932)：新ドイツ語文法教程。東京：三省堂 1969。

— (1933): 意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究。東京：三修社 1977。

— (1935-39): 独作文教程。東京：三修社 1971。

— (1936): Daß es nur so eine Art hatte. 所収：関口存男：ドイツ語学講話 1，東京：三修社 1975, S. 329–344。

— (1938-40): 接続法の詳細。東京：三修社 1973。

— (1956): 改訂標準初等ドイツ語講座。東京：三修社 1977。

— (1960): 冠詞　— 意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究 —。第一巻　定冠詞篇。東京：三修社 1976。

— (A): Doch とは何ぞや？　所収：関口存男：ドイツ語学講話 1 (1975), S. 201–206。ドイツ語訳：Was heißt ‚doch'? Eingeleitet und übersetzt von Kennosuke Ezawa. In: Weydt (Hrsg.) (1977), S. 3–9.

宗宮好和 (1994)：文意味と発話意味　— やっぱりと doch の場合 —。所収：千石喬ほか (編集)：ドイツ語学 2，東京：クロノス，S. 165–197。

Weydt, Harald (1969): Abtönungspartikel. Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen. Bad Homburg v. d. H. / Berlin / Zürich: Gehlen.

— (1986): Bedeutungseinheit und „Ambiguität" Abtönungspartikeln (sic!). In: エネルゲイア 12, S. 18–33.

— (Hrsg.) (1977): Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung. Tübingen: Max Niemeyer.

Weydt, Harald / Harden, Theo / Hentschel, Elke / Rösler, Dietmar (1983): Kleine deutsche Partikellehre. Ein Lehr- und Übungsbuch für Deutsch

als Fremdsprache. Stuttgart: Klett 1985.
Weydt, Harald / Hentschel, Elke (1983): Kleines Abtönungswörterbuch. In: H. Weydt (Hrsg.): Partikeln und Interaktion. Tübingen: Max Niemeyer, S. 3–24.
吉田光演 (1986)：「やっぱり」と心態詞の „doch“, „ja“。所収：Southern Review（沖縄外国文学会発行）1, S. 22–32。